

## 大宰府アカデミー・令和編 第4講 令和5年7月19日(水)質問及び回答(Q&A)

### 「朝鮮式山城

～水城・大野城・基肄城・鞠智城～」

講師・回答: 赤司 善彦氏(大野城心のふるさと館館長)

この度は大宰府アカデミー・令和編を受講いただき誠にありがとうございます。  
皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。  
なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

Q/ 赤司先生が講座で述べられたように大野城・基肄城の築城が 650 年から着手されたとすると、その目的、また契機は何でしょうか。

### A/ 回答

『日本書紀』白雉二年(651)条に新羅が唐の礼服の制度など各種の唐風化を推進したことで、新羅使の来朝の折に、唐服を着用していたことを詰問し追い返したと記しています。続けてここで新羅を懲らしめるために難波津から筑紫の海に船をいっぱい浮かべて新羅を呼びつけることを提案しています。

たんに唐風化した新羅を責めたのではなく、唐が朝鮮半島の争いに介入することを阻止しようとしたとする見方もあります。この記事をもって実際に軍事プレゼンスに及んだとは思えませんが、新羅を仮想敵国と位置づけてその対抗措置として山城を築城し軍事拠点を形成したと考えられないでしょうか。

またたとえば、640年代後半の淳足柵・磐船柵造営という東北地域における軍事的な動向との連動ということも考えられるのではないかと思います。このことは、唐の東アジア遠征を受けたものともされていますから、それが南方でもあったのではないかとみられるのです。つまり、ここでも前述した唐による朝鮮半島への介入という対外的な危機を受け止めたということもあるのかもしれません。

いずれにしても確定的とは言えず、今後の研究によって深めていかなければならない点だと思えます。

Q/ 古代山城の倉庫群のお話がありましたが、築城当初には倉庫群は想定されておらず、軍事的な機能をもった山城から備蓄基地へと変わったことで、倉庫群が建てられたのでしょうか。

#### A/ 回答

講座の中でも申し上げましたが、山城、特に筑紫城(大野城・基肄城・鞠智城)の中の建物については、その移り変わりを、私は次のように考えています。つまり築城直後の七世紀末に、長倉という大規模な倉庫が建造されます。その後奈良時代になると、三間×五間の礎石高床倉庫の造営があり、さらに九世紀以降、三間×四間のやや小規模な倉庫が建造されていきます。しかもこれは建替ではなく、増築されているのです。これは、主に大野城の場合ですが、基肄城も奈良時代はほぼ同じ動きで、鞠智城はやや様相が異なりますが、ほぼ同じように倉庫群の造営・拡張が行われています。

この整理によれば、倉庫群は築城当初から設けられていたとみななければならないでしょう。そして、それは軍事的な兵站機能をもっていたと考えられます。畿内・瀬戸内海沿岸の山城が停廃されていく中、八世紀以降も存続した筑紫城(大野城・基肄城・鞠智城)は、そうした兵站機能を維持しつつ、その主要な役割を、行政的な地方支配に関わるとみられる備蓄機能へと変化させていったものと考えています。

※ ご質問ありがとうございました。